

コメント

コプフ・ゲレオン

今日、比較思想学会の第四三回大会にシンポジウムのコメントーターとして招待いただき心から感謝を申し上げます。三月に開催された研究会では、発表の後とても面白いディスカッションができました。そのとき、比較思想学会は比較哲学を奨励

する学会として哲学的学問とディスカールに多く寄与するので哲学世界にとって大切であると思えました。今日も岩野卓司先生、木岡伸夫先生、そして竹内整一先生の発表を三つ拝聴させていただいて色々勉強になったのみならず、哲学を創造する機会に参加したように感じて嬉しく思いました。有り難うございました。

今日のシンポジウムのテーマは「再考・日本人の思惟方法」でした。テーマの意味は、「日本哲学」あるいは「日本人の哲学」とはどういう意味を持つか、ということでご宜しいかと思えます。「日本哲学」というプロジェクトの方法と場所は何でしょうか。日本哲学と他の哲学的伝統を分ける何かが有るのでしょうか。「日本哲学」という概念は決定できる本質を同定できるのでしょうか。「日本哲学」として指し示される哲学は全て共通するものがあり、他の伝統から出た哲学と全然違うものでしょうか。そうしたとしたら、日本哲学に於ける二つのテキストには、本質的な共通があるのでしょうか。日本哲学の本質とは何でしょうか。哲学者自身が属する民族性でしょうか。テキストが書かれた言語でしょうか。哲学的プロジェクトの方法でしょうか。それは哲学を考える日本人と日本に住む哲学者にのみならず、日本哲学を研究したり書いたりする、外国に住む外国人にも大切な、解決しなくていけない質問になります。

そういう問題を解決するのに必要な鍵は勿論「哲学」という言葉の意味です。皆様よくご存知のように、西周はヨーロッパとアメリカからきた哲学を、近代以前に日本で発展した思想と識別しました。そういう概念的区別によって種々の考え方を識別しました。それだけではなくて、伝統と伝統の間にある区別は本質的だという主張を意味します。そのように伝統の本質化は維持できるのでしょうか。しかし、そうすると、他者を理解すること、比較哲学のプロジェクトは不可能にならないでしょうか。しかし、本質主義によると、日本哲学の中に方法、立場、そして所信の多様性はあまりないことになります。分析哲学者のように、哲学を「論理と議論の構想を分析すること」として定義すれば、道元と空海のような思想者は哲学者として見なされません。しかし、プラトンもアウグスティヌスもそういう哲学の基準に至れないと言えます。もし、「哲学」とは、ウイットゲンシュタインのように概念の明確化、西谷啓治によると自己発見、ジョン・マラルドの「文化的なイデオムの翻訳」とし

て定義すれば、道元も荻生徂徠も哲学者になります。

シンポジウムのテーマに戻る前に、全然関係がない話を二つ伝えたいと思います。一つの話は井上円了に関するものです。日本には妖怪学の創始者として知られている井上円了は、実はまじめな哲学者として「仏教哲学」というプロジェクトを学問として考えて発展させました。それに加えて、井上円了はヨーロッパの啓蒙主義に従って妖怪信仰を批判したと言われます。しかし、井上円了は本当に妖怪信仰を批判したのでしょうか。妖怪信仰は本当に合理の反対でしょうか。円了は東洋大学を退職したあとで、哲学堂公園を作りました。哲学堂公園の哲理門の中には幽霊と天狗がいます。勿論、幽霊と天狗は哲学的なものではありません。何故、天狗と幽霊は寺院の山門にいる仁王のように哲理門に入っているのでしょうか。それはどういう意味でしょうか。哲学は妖怪学や民族宗教との関係が有るのでしょうか。哲理門の中にある幽霊と天狗は哲学の中にも哲学ではないものもあり、哲学ではない文献と思想の中にも哲学的なものも有るといふ解釈も可能です。

二つ目の話は『無門関』から借ります。『無門関』の第五則によると、ある人は足でも手でも樹の枝に触らなくて口で枝にぶらさがっています。その時、誰かが「どうして達磨が西から来ましたか」と聞きました。もし樹にぶらさがっている人が答えないと失礼になりますが、答えると死ぬという問題になります。そういう話は禅宗の伝統において、難しい歴史と意味を持

ちますが、私にとってはそういう公案は比較哲学のプロジェクトを明らかにする比喩になります。比較哲学はある意味で、会話として理解できればいいと思います。哲学者は自分の立場のみに立つと会話は不可能です。しかし、他者の立場を理解するために自分の立場を出ると、まえの立場がなくなつて変身します。例えば井上円了が仏教の概念をヨーロッパ哲学の概念を利用して解釈したとき、彼が使った仏教の言葉とヨーロッパ哲学の言葉との意義と意味が変化しました。それは、比較哲学の目的です。

だから、今日のシンポジウムのテーマは有り難いです。今日のテーマによると、日本哲学の特徴は方法です。同じように、分析哲学といわゆるコンティネンタル(大陸)哲学との区別は、言語と哲学者の民族ではなくて、むしろ哲学者の方法です。それに加えて、岩野卓司先生、木岡伸夫先生、そして竹内整一先生は、皆、比較哲学の方法と役割を理解するために、哲学の「贈与」、「あいだ」、または「あわい」という必要な概念を分析してくれました。ある意味で、テキストとテキスト、そして、思想者と思想者のあいだとあわいの哲学的な共同体を調べると比較哲学が生じます。言い換えると、ジョン・マラルドが述べたように、哲学とは、あるテキストにおける文化的なアイデアの翻訳ということですが、今日、三つの発表を拝聴したとき、比較哲学の意味をより深く理解させていただきました。心から感謝を申し上げます。

最後に先生方に質問があります。岩野先生の発表ですが、諸国、動物、植物、そして生死の六界が含まれる一つの世界、西田の言葉を使ったら、世界的世界は哲学のデイスクールとして解釈できますか。そうすると、比較哲学よりグローバル哲学というほうが宜しいのではないですか。もう一つは、哲学の役割は贈与とすれば、哲学は商品化すると思われませんか。木岡先生の発表ですが、哲学の場所は間文化、あとは相互主観性の間とすれば哲学の方法は、ディアロジカル会話的になりますか。方法も間にあるようにならなくていけないですか。竹内先生の発表の、「あわい」というのは日本のものより世界的な現象を解釈できる、日本伝統で発展させた概念であると言ってよいでしょうか。有り難うございました。

(Geirion Kopf, 宗教学・比較哲学、ルター大学教授)